

## 中野重治と窪川鶴次郎

Shigeharu NAKANO and Tsurujiro KUBOKAWA

大塚 博

Hiroshi OHTSUKA

### 要 旨

中野重治と窪川鶴次郎は、一九二三年春、金沢の旧制第四高等学校で出会った。以来、雑誌『驢馬』の同人時代、プロレタリア運動の時代を共に歩み、同じく転向の体験を経て、戦後の時代へと、生涯の交友を結んでいくことになる。そうした交友の中で、中野重治にとって窪川鶴次郎とはどのような存在であったのか、中野の窪川に対する評言を中心に考察した。それらは、『中野重治全集』（新版、筑摩書房）によって確認できる全八十五点である。これを、交友関係の中での窪川について回想したり、文学に関する所懐を述べたりしている五十一点と、批評家・評論家としての窪川の発言に言及しつつ書いている三十四点とに大別し、それぞれの特質を析出した。

前者では、中野が窪川との出会いや『驢馬』時代を回想するものが多く、中野の窪川への信頼が読み取れる。ことに、中野がいち早く革命運動に入っていく中

で、窪川の居室が思想と文学両様で、彼の存在が信頼されていることの象徴たり得ている点を指摘した。また、中野が、獄中にある時期や、太平洋戦争開戦時の逮捕の危機にあった際の、窪川の行動や提言を通して、通常の交友を超えた関係を確認した。

後者では、中野が、自作に対してなされた窪川の批評に精神的に支えられたこと、ひるがえって、窪川の評論集『現代文学論』を高く評価している点を踏まえ、具体的にどのような批評のあり方を評価しているのかを考察した。

最後に、一九三六年に窪川が座談会で発言した、行為・手段は常に人間的であるべきだ、という指摘を中野が生涯重視し続けたことをとらえ、窪川鶴次郎という存在とその発言が中野にとっていかに重要なものとしてあったかを指摘した。

中野重治は一九〇二年一月二十五日、福井県坂井郡高椋村（現・坂井市丸岡町）に生まれた。窪川鶴次郎は一九〇三年二月二十五日、静岡県小笠郡内田村（現・菊川町）に生まれた。中野重治が一年と一月、年長になる。

二人が出会ったのは、金沢の旧制第四高等学校時代のことである。一九二三年春、ともに落第をした者同士の出会いだった。四高入学は中野が一九一九年、窪川が一九二〇年なので、学年としては中野が二級上となる。しかも文科の中野に対して、窪川は理科だった。普通ならば会いにくいこの二人を、会わせる場となったのは四高短歌会である。短歌が、学年や学科の違う中野と窪川を会わせたのである。

その後、中野重治は一九二四年三月に四高を卒業、上京して、四月には東京帝國大学文学部独逸文学科に入学する。一方の窪川は同年三月、二度目の二年生を了えたところで退学、上京して、五月には貯金局に勤めることとなる。しかしその後二人は、雑誌『驢馬』の同人時代、プロレタリア運動の時代を共に歩み、同じく転向の体験を経て、戦後の時代へと、生涯の交友を結んでいくことになる。

小稿では、中野重治にとって窪川鶴次郎とはどのような存在であったのか、中野の窪川に対する評言を中心に考察することとしたい。

## 1

中野重治はその生涯に窪川鶴次郎についてどのように書いているだろう

うか。どのように評しているだろうか。

『中野重治全集』（新版、全二十八巻、筑摩書房、一九七六―一九八〇）によれば、中野重治が窪川鶴次郎について、あるいは窪川鶴次郎に触れて書いている各種の文章は全部で八十五点ある。それを大雑把に、交友関係の中での窪川について回想したり、文学に関する所懐を述べたりしている文章と、批評家・評論家としての窪川の発言に言及しつつ書いている文章とに大別すると、前者が五十一点、後者が三十四点（末尾の「資料一覽」参照）ということになる。もとより、両者重なり合うものもあり、どちらが主なのかという視点で仮に分けてみたものに過ぎない。比較対照するような資料がないので、客観性のある言い方はできないが、長い交流を物語るように、交友関係のなかの窪川に触れる度合いがやはり高いことがよく見えてくる。

まずは前者を取り上げて、中野と窪川の交友の有り様、またそれを通して、窪川に対する心情を探ってみよう。

中野重治が窪川鶴次郎に触れた最も古い発言は「嘘とまことと半々に」（『文学時代』30・2）である。この短いエッセイで中野は自分の生まれ故郷の村のことを語り、自分の顔や好みや考え方を述べている。そして、「あるとき非常に不愉快なことで不愉快な相手を長い時間かかつてどうとう呼びだしてやつたら、窪川鶴次郎がほめてくれた。」と書いている。これは四高時代の話で、その具体的な内容は分からぬが、中野の小説『歌のわかれ』の一節を想起させるエピソードだ。『歌のわかれ』の主人公片口安吉が、四高生仲間の佐野が自分に示した態度に一度は我慢をして下宿

へ帰るのだが、「佐野の無礼は許せるが、佐野の無礼をおまえが許すことは許せぬぞ。」と思い直し、丸鑿をポケットに、再び佐野のいるところへ戻っていくという周知の一節だ。二つの話を関連づけて何かを言おうというのではない。ただ、若き日の中野重治の、己を待する精神の顕れとしては同根のものだろう。

だが、小説内の安吉が内省しつつもお友人間に孤高の姿を維持するのに対して、このエッセイでの中野は、窪川が「ほめてくれた」と率直に喜びの心情を語る。「不愉快な相手を長い時間かかつて」「呼びだしてやつた」ことを誇るのではなく、窪川にほめられたことをこそ言おうとしている。かくして、窪川鶴次郎は、中野にとって自分に自信を与えてくれる人物として登場する。

このエッセイがそうであるように、最も多く触れられるのは、やはり四高時代のことである。五十一・中七点のエッセイで四高時代の窪川とことが語られる。そこでは、文学に触れた記述が多いのは自然なことだが、それよりも際立つのは、半数以上の四点のエッセイで、窪川との出会いが繰り返し回想されることである。戦前の「わが文学的自伝」(『新潮』36・8)から、戦後の「岩波文庫版『中野重治詩集』後書き」(56・3)「文学と私」(NHKの放送文化ライブラリー用の朗読、71・2・3)「生理的幼少年期と文学的少青年期——第一巻「詩集」「春さきの風」——」(『中野重治全集』第一巻「著者うしろ書」76・9)へと、自身の文学的生涯を振り返る時には必ず窪川鶴次郎との出会いがまず語られる。その語り口は生涯を通じて変わることがない。人と人との交友にあ

つては出会いが必須の契機であることは言うまでもないが、中野のこうした繰り返し言及は、窪川鶴次郎という存在と、その出会いとを、最重視していたことの証と見ていいだろう。

窪川に関わって、次いで多く触れられるのは、『驢馬』の時代である。『驢馬』は窪川鶴次郎、中野重治、堀辰雄、西沢隆二、宮木喜久雄、平木二六らが出した同人雑誌で、一九二六年四月から一九二八年五月まで、全十二冊を刊行した。比較的順調に出た第十号までは、編輯兼発行人は窪川鶴次郎で、発行所は東京・田端の窪川の自宅となっている。一年ほど空いて一九二八年に断続して出た二冊は宮木喜久雄が編輯兼発行人である。詩と評論を中心とした雑誌だったが、同人たちの精神的なよりどころだった室生犀星や、芥川龍之介、萩原朔太郎、佐藤春夫らにも寄稿を得て、注目された。

中野と窪川の『驢馬』掲載をまとめてみる。中野は、詩二十一編、翻訳六編、評論四編。一方、窪川は、詩二十三編、俳句三句、小説五編、翻訳三編の他、同人雑誌とおぼしき短文が七編である。中野は小説は一編もなく、逆に窪川は評論は一編もない。中野のちには小説も書くようになり、一方の窪川は小説は捨て、評論家として立つていくことになるのだが、『驢馬』の時代、両者の文学的志向の違いは明らかだ。

この時期、中野にとっては思想とそれに基づく文学を血肉化していった時代であった。前年一九二五年夏、大間知篤三、林房雄を通して新人会に入会。十月には東大内に社会文芸研究会を作った。『驢馬』創刊の一九二六年一月には、共同印刷所のストライキに、新人会から派遣されて

働くという経験もしている。続く二月、林房雄、千田是也らとマルクス主義芸術研究会をつくり、十一月には、日本プロレタリア文芸連盟の日本プロレタリア芸術連盟への改称の際、連盟に参加、中央委員に選出されている。『驢馬』刊行に重なるわずか一年有余の期間、中野はマルキシズムへ急接近し、それを背景としたプロレタリア文学を模索した。

マルキシズムとプロレタリア文学への接近を鮮明にしていく中野に応ずるように、堀辰雄を除く他の同人たちもそこへと惹かれて行くことになる。ただし、『驢馬』掲載の同人たちの作品にその傾向が特に現れていなければならぬ。しかし、象徴的に言えば、『驢馬』の発行所とされていた、当時の東京市外田端二二六の窪川の部屋が、先行する中野と遅れて近づいていく窪川たちの有り様を示している。この部屋は宮本喜久雄と二人で借りていた下宿で、ポプラ坂下にあった。

『驢馬』の集まりは窪川の部屋でなされるが多かった。その部屋で、同人たちは『驢馬』の編集をしたり、文学を語り合った。すでに触れた経緯で、中野が『驢馬』に発表していく作品群は、明らかにマルキシズムの影響を見せはじめていた。同人たち一人一人の文学的資質は、『驢馬』発表の作品に徴しても、それぞれに違う。しかし、のちのマルキシズムとプロレタリア文学への接近から考えても、そこで語られる文学の方向は次第に思想的な色合いを強くしていったに違いない。

戦後の文章だが、中野重治に、「ふたしかな記憶」(『中央公論』53・7)という、堀辰雄の死に際しての回想がある。堀辰雄の回想なので、『驢馬』時代にも多く触れている。その文脈の中で、次のような一節が見

出される。

あるときわれわれは、共産主義のことを少ししらべようというので、ブハーリンの『共産主義のABC』を読むことにした。田端の窪川鶴次郎の部屋で、まだ日本語がなかったから——と思う。——ドイツ訳の黄表紙本でわれわれはやつた。あるいは堀は、フランス訳を持つていたかも知れない。しかしこれは、二度か三度で止めになつてしまった。

『共産主義のABC』はロシアの革命家ブハーリンが、一九一九年に、エフゲニー・プレオブラジエンスキーと共同で執筆したものである。マルキシズム研究所と早川二郎による日本語がイスクラ閣から出たのは一九二九年であり、翌一九三〇年には田尻静一訳が政治研究社から出ている。書かれているとおり、「日本語がなかった」のでドイツ語訳でやったのであろう。堀辰雄が「フランス訳を持つていたかも知れない」というのは、真偽のほどはともかく、そういうことがあってもおかしくないという当時の状況を語って余すところがない。

国家権力による凶暴な弾圧が激しさを増していく中で、こうした集まり、勉強会が如何に危ないものであるかは言うまでもない。まして、そのために部屋を提供することの危険は倍加してくる。この勉強会の日時は特定できていないが、窪川鶴次郎自身が、言い方を変えれば窪川の部屋が、深く信頼されていたことを意味するものであろう。

また、芥川龍之介を回想した「小さい回想」（原題「芥川龍之介氏のこ」と）34・11「文藝春秋」には、中野が芥川から呼び出された日のことが書かれている。

たぶん二六年の春の終りごろに、同人の誰かが「芥川さんが君に会いたいそだよ。」と言っていた。窪川の部屋で「驢馬」の寄合があることを知っていて、そのついでに宅へ来てくれてもよし、私の指定した場所へ出向いてもよしということだった。私は呼び出そうなどとは思わなかつたから寄合の日に出かけて行つた。

ここで「二六年」というのは、事実としては一九二七年の六月頃のことだ。芥川の自殺は翌月七月二十四日のことだから、わずか一月ばかりの直前ことになる。この日芥川は、中野に対して文学を止めぬように求め、中野たちの向かおうとする方向の新しさと正しさを言い、新経済政策を打ち出したレーニンを支持する言葉を述べ、自分の書いた詩編を見せるなどした。中野には病人くさく感じられた芥川だったが、その話しぶりは活発だったという。大正文壇を牽引してきた一人である芥川から、中野はその新しさごと認められた形だった。そうした二人の会見の模様はともかくとして、芥川に中野のいる空間として意識されていたように、窪川の部屋は文学的空間として確かに認知されていたと言えよう。

『驢馬』時代の中野と窪川の直接的なやりとりについては、一昨年、筆者は資料的側面から明らかにする機会を得た。金沢の石川近代文学館が

架蔵している中野の窪川宛書簡の一つに、『驢馬』第三号（一九二六年六月）に掲載された「東京帝國大学生」「思へる」の二編の詩の原稿が同封されていた。それらの翻刻と解説を、「梨の花通信」第五十五号（中野重治の会、08・8）で行つたものである。

この手紙は一九二六年四月二日の消印で、室生犀星気付で出されている。この頃郷里福井県丸岡の一本田に帰京していた中野が、窪川の住所が分からずに犀星宛出したものであった。消印からしておそらく四月一日の投函であるうが、この日はまさに『驢馬』創刊号の奥付に記された発行日付でもあった。中野は、郷里から、創刊された『驢馬』のために、その編集を担当している窪川鶴次郎に向けて、詩編を送つたのである。

奔走する窪川への何よりも強い、文学的メッセージであつたに違いない。あらためて、思想と文学を血肉化していった時代に、中野重治にとつての窪川鶴次郎という存在は、いわばその居室・空間に象徴されていたと言えるのではないだろうか。

## 2

同じ四高出身と言うに止まらず、その後の革命運動、プロレタリア文学運動をともにしていった信頼感が、他の誰との間とも違う、中野重治と窪川鶴次郎の関係を築いていった。

例えば、中野が投獄中（一九三〇年と、三二―三四年の二度）の時、転向後の思想統制がいよいよ激しくなっていく時期、そして、太平洋戦

争開始の時、窪川はさまざまに中野を助けている。

戦後の文章だが、高村光太郎を回想した「坂の途中」（『文藝』56・6）というエッセイの中で、最初の獄中期に触れた次のような一節がある。

一九三〇年春に私たちは逮捕された。むろん暮らしに困った。そのとき改造社で、一冊三十銭の『新鋭文学叢書』というのを出している、龍胆寺雄の『放浪時代』、井伏鱒二の『なつかしき現美』、佐多（当時窪川）稲子の『研究会挿話』、林美美子の『放浪記』などがはいつていたが、おもに窪川鶴次郎が世話をしてくれて、その一冊として私の『夜明け前のさよなら』という本をつくってくれた。

ここに書かれているとおり、窪川が「世話をして」できあがった一冊だったが、巻末に寄せた後記に、窪川は「編輯・校正をやつたのは、彼ではなく、原まさの及び我々友人一同である」と記している。原まさのは中野の妻、原泉のことである。多くの支援の手の中心に窪川がいて、力を集めた結果の一冊だったことがわかる。内容は、小説三編、詩九編、エッセイ十二編からなる。翻訳を除けば、評論集『藝術に関する走り書 的覚え書』（改造社、29・9）、小説集『鉄の話』（30・6）に続く著書で、詩文集というべき編集となっている。同じく後記で、窪川はこの二著を挙げた上で、「それ等に對してこの本は彼の爲した仕事の総合的なものである」と意味づけている。

これに對して中野は、当時書かれた手紙「窪川鶴次郎へ」（30・9・17

付、「ナツプ」31・6）の中で、「改造社からの出版について僕自身もそうそうチャチなものと恐れている訣ではない。殊に君達が編んでくれ、君があとがきを書いてくれることは僕の意を強うさせる」と、率直な気持ちで獄中から寄せている。

さらに、戦後の新潮文庫版『歌のわかれ』（50・7・30）の「前がき」で、中野は次のように書いている。

ちょうど十年まえに出たこの集が、新潮文庫の一冊という形であらためて出るようになったのをわたしはよろこぶ。十年まえにもやはり窪川が解説を書いてくれた。いよいよ日本が、帝国主義的侵略戦争に決定的にのめりこむという時期だったから、こういう集の解説も決して容易のことではなく、窪川はよほど骨折つてくれたようにわたしに見えた。わたし個人としていえば、その後ひきつづいた長い戦争のあいだ、窪川の書いてくれたあの解説はわたしにとつて生きて行くうえで、激励でもあつた。おそらくこれは、人にむかつては説明のしようのないことでもあろう。

「十年まえ」とは、新潮社から昭和名作選集の一冊として『歌のわかれ』が刊行された一九四〇年八月のことを指す。この作品集には「歌のわかれ」「空想家とシナリオ」「村の家」の三作品が収録されていた。戦後の版は、収録作品は同じで判型を文庫版にあらためたものだ。

この「前がき」で中野は、窪川が「骨折つてくれた」解説を、「その後

ひきつづいた長い戦争のあいだ、窪川の書いてくれたあの解説はわたしにとつて生きて行くうえでの激励でもあった」とまで書いてある。加えて、「おそろくこれは、人にむかつては説明のしようのないことでもあらう」とも書いてある。

中野重治は、一九三四年五月の転向出所以降、常に国家権力の監視にさらされていた。一九三七年十二月からは執筆禁止の措置を受けた。それを、十ヶ月余過ぎたところで自ら打ち破るようこじ開けて、書いてきたのであった。だが、それは、激化する日中戦争の中で思想統制がいよいよ本格化し、再度の執筆禁止措置を受けぬよう用心をしつつ、極度に制限された中での苦しい文学表現であった。だからこそ、中野と同様に逮捕・転向・出所を経験し、転向小説「風雲」（中央公論）34・11）を書いて再出発してきた窪川は、転向後の中野作品の読み手として、最もふさわしい存在であったと言えるだろう。

では、窪川は中野の何を讀み取ったのか。

新潮文庫版『歌のわかれ』の解説に窪川は言う。中野の人間及び文学の実現される方法は始めから特定の水準が与えられていて、それは中野の生活の進展、成熟によって現実的な力の充實を増してゆくのである。そして、「私の考へでは、かやうな方法上の現実的な力の充實を増してゆく大きな機縁となつたものとして、本書にをさめられた『村の家』に相當する時期を擧げることが出来ると思ふ」と。

「『村の家』に相當する時期」とは、未だ獄中にあつた時期から、転向出所し、郷里の家で一夏を暮らした一九三四年の頃を指している。中野

は、ここから自らの思想と文学の検証をしつつ執筆活動を再開していった。転向の刻印を浮かばせながら、さまざまに模索していった中野の文学表現を、窪川は力として意味づけ、その背景を「村の家」に相當する時期」に讀み取つたのである。端的に言えば、転向後の中野の模索を評價したものには他ならない。「あの解説はわたしにとつて生きて行くうえでの激励でもあつた」と中野が言う所以である。

もつとも、このような窪川の「激励」は、時には友人關係を超えた「忠告」とも言えるような、かなり踏み込んだものともなつた。

一九四二年一月、窪川鶴次郎から中野重治に宛てた手紙（佐多稲子「あとや先き」中央公論社、93・4、所収）がある。窪川稲子の名で送られたものだが、一月三日の日付が記されている。

一九四一年十二月八日、日本は太平洋戦争に突入した。翌九日、全国的檢挙が行われた。東京の中野の家にも特高が来たが、折しも中野は父の重篤・死去のために、十一月十八日朝、郷里一本田に帰っており、不在のため逮捕は免れた。『敗戦前日記』（中央公論社、94・1）には、九日、東京から電報が来たことが記されているが、それは妻の原泉が「ケサキタイサイフミ」と打電したものであつた。その「イサイフミ」で、原は、「四十九日を済まして帰るといふことにしたらいかがでしょう」と書き送つた。父の死去は十一月十九日であつたが、中野はその勧めに従つてさらに郷里滞在を延ばすことにした。そこへ、窪川の手紙が届いたわけである。

窪川は、むろん、中野が拘束されないように、その身を案じている。

たとえば、現在の状況を考えれば、郷里にずっといて、万全の策を持続的に取るべきこと。窪川自身が保護観察所へ行き、中野のことも聞いてこようということ。保護観察所や警視庁や検事局に手紙を書くべきこと。等々、さまざまな具体的方策について書いている。経済のためには、翻訳が何かしたらどうか、場合によっては窪川自身の名で出しても良いなどと勧めてもいる。

しかし、この手紙は、普通に友人関係を持つ者同士の手紙とはひと味違う様相を呈している。それは、中野の実家の家庭問題にかなり踏み込んで意見を述べている点である。

手紙は、中野にとつて今は、「実家における責任をあくまでも果されることが、何よりも肝要なこと、思います」と書き記すことから始められている。その後には、先に触れたような具体的な方策について、こまごまと丁寧に書いたあと、手紙の後半は再び家庭の問題に戻っている。

窪川は言う。「僕としてはこの際さし出がましい言い方だが、やはり、兄としては、先ず何よりも、妹さん二人の身の振り方を定める大きな責任が当面の問題ではないでしょうか。たとえば、一人の妹は東京によこして勤めさせるとか、一人だけでも嫁にやるとか、実家で働きながら老母と中野の世話をさせるとか、などと相当踏み込んで、具体的に口を挟んでいる。そして、「こんな風にあからさまに書くのは、現在の兄にとつては、むしろかゝる家庭の人事問題が経済その他のどの問題よりも重要な、且つ難かしい、解決すべき中心問題のように僕には想像されるからです」と述べるのである。

この内容・提案自体には、原泉や窪川稲子の意思も反映されていたのかも知れない。しかし、この述べ方は窪川鶴次郎自身のものだ。ただし、このような言説にある危うさが潜在していたと見られないこともない。それは、「村の家」で、転向・出所して郷里に帰ってきた主人公の高畑勉次が、父親から筆は捨ててしまえ、百姓せえと言われ、そこに「畏のようなもの」を感じとつたのに通じるのではないかと思われるものだ。だが中野は、窪川の言そのものをきちんと受け止めた。事実、詳しいことは略すが、この年、五月十六日、妹の一人美代子は落合栄一と結婚している。

中野と窪川は、高校を同じくし、一緒に同人雑誌を出し、文学運動とともに闘い、転向後の後退戦を闘ってきた。一般の交友よりもはるかに密度の濃いものであることは確かだが、この手紙からは、さらに奥深いところでの信頼関係が築かれていたことを知ることができる。中野から見て、それだけ窪川鶴次郎という存在は重要であった。

### 3

次に、批評家・評論家としての窪川について言及しているものを取り上げよう。

戦後の一九五一年、当時のチェコスロヴァキア社会主義共和国のプラハ出版所から小林多喜二の『蟹工船』がスロヴァキア訳として刊行された。同著に、中野重治は「日本におけるプロレタリア的・革命的な文

学の流れについて」と題した「解説」を寄せている。その中で、一九三二年以降のプロレタリア的・革命的組織への弾圧に触れた後、次のように書いている。

一九三四年の日本ドイツイタリアの反コミンテルン協定の成立後は、残されたわずかの人も書くことを禁止され、評論における窪川鶴次郎のいくらかの仕事、詩における小熊秀雄の仕事の後、第二世界戦争に侵略国としてつき入った日本は、そのすべてのプロレタリア的・革命的文学の流れを中断してしまいました。

一九三四年以降一九四五年度の敗戦までの記述はたったこれだけなのだが、詩の小熊秀雄とともに、窪川の評論の仕事が挙げられている。「いくらかの仕事」について具体的な記述はないが、転向の時代における窪川の評論家としての仕事の中野に高く評価されているのが知られる。

では、窪川の仕事は、具体的にはどう見ていたのだろうか。

まずは、自身の作品への窪川の評価を、中野がどう受け止め、語っているかを見よう。一九四〇年四月の「月刊文章」に寄せた「『空想家とシナリオ』について——自作を語る」に次のような一節がある。

当時窪川鶴次郎がしてくれた批評からはいろいろと教わるどころがあつた。これはよその人にもあることかも知れないが、自分で気つかない自分のいいところということについて教えられた。なるほ

どおれにはそういういいところがあるのかなアと納得する心持ち、これは小説作者としてはたいへんにありがたい仕合せだと思ふ。

「当時」というのは「空想家とシナリオ」連載当時のことを差している。窪川鶴次郎のまとまった「空想家とシナリオ」評としては、先にも取り上げた新潮社版の昭和名作選集「歌のわかれ」の解説がある。しかし、この作品集は一九四〇年八月刊行なので、「空想家とシナリオ」について——自作を語る」執筆時点では、これは該当しない。他をあたってみると、窪川鶴次郎の評論集『現代文学思潮』（三笠書房、42・7）に収録されている文芸時評二点が確認できた。

まだこの回だけでも終つてゐさうに見えないが、これは中野の面目に重厚さを加へ、彼をいよ／＼重からしめる作品であることは確かである。創造の苦痛がないといふことの苦痛、區役所やその往復の感想、さういふものを通して主人公とその生活の實體が作者獨特の思考といふ形で描き出されようとしてゐる。本號では「本と人生」といふシナリオについての主人公の空想が展げられ、日本の映畫や女優についての感想になり、日本人全體の通有性にも觸れてゐる。作者獨特の叙述は、本號では論理を追ひ過ぎて前號よりは主人公とその生活の實體を稀薄にしてゐる。（昭和十四年七月）

これは非常に格調のある、中野の新しい文章の方向を示すやうな立

派なものである。新しい方向といふのは対象への喰ひ入り方がある地味な着實さを増して来たといふことである。終りの方で調子が落ちて来てゐるやうだが、これは未完の物らしいからこれ以上は觸れないで置く。(昭和十四年九月)

両者ともほぼ全文である。初出はまだ確認できていないが、(昭和十四年七月)、(昭和十四年九月)と記載されており、これら二点が中野の言う「当時」に該当するものと見て差し支えないだろう。これらの僅かな時評で、窪川は、「主人公とその生活の實體が作者獨特の思考といふ形で描き出されようとしてゐる」こと、「対象への喰ひ入り方がある地味な着實さを増して來」て、「中野の新しい文章の方向を示すやうな立派なもの」だと高く評価している。僅かな言葉とはいえ、中野重治の作品を読み続けてきたものならではの的確な評価に、「自分で気のつかない自分のいいところということについて教えられた」という思いを中野は抱いたのであろう。

次に、窪川鶴次郎の批評そのものについてどう評価しているかを見よう。

中野重治が窪川の評論家としての仕事がある程度まとめて論じているのは、窪川の評論集『現代文学論』(中央公論社、39・11)についてである。「批評の精神」(「懸賞界」下旬号、39・12)で、明瞭なことをそのとおり書きあらわすことが難しくなってきた中での窪川の「批評精神のねばり強さ」を指摘した上で、次のように述べている。

おそらく『現代文学論』における批評精神のあり方は、現在一般に批評精神にかくあつてほしいと思われるそのあり方である。主観が力づよいことによつてかえつて対象を独断的に截断せず、対象にたいする愛憎が深いことによつてかえつて対象にたいする取りあつかいが綿密、親切をきわめているということ、これらのことは、日本文学の現在の段階の体系づけが困難であるだけに、今後の批評にはますます要求される事柄なのである。

ここで中野は、主観の力強さが独断的にならず、対象の扱いが綿密であることを、「現在一般に批評精神にかくあつてほしいと思われるそのあり方である」と窪川の「批評精神のあり方」を評価している。さらに、同時期に書かれた「日本語の問題」(「都新聞」39・12・8~11)の方では、「現代文学論」六百六十ページの龐大な一冊は、批評文学を科学の上に建てようとしている点、無関係なように見える日本語の成長発展のためにも有力な暗示を与えているのである」とも評価している。

こうした中野の評価は、具体的にはどのようなところを差してのものだろうか。

『現代文学論』収録の「島木健作論」(「文芸」38・10~11)を取り上げる。

窪川はこの論で島木健作の小説「生活の探求」を分析し、島木の文学表現が特別なボキャブラリーから成り立っていること、そこにはよそ行

きの文語体的感情が内包されていることを指摘し、さらに、用語とテーマの関わりについて次のように批評している。

彼のテーマに必要とあれば如何なる用語も驅り出してゐる。驅り出してゐるとは言つても、それらは彼獨自のものになつてゐるのではない。何となれば、島木氏は知識階級の批判を都市生活の批判にまで脱線するほど勢ひ込んでやつてゐながら、その批判は肝腎の生活の探求といふテーマとは何ら関係も持ち得ないで、田舎まはりの新聞記事受け賣りの政談演説になり終つてゐるからである。

窪川は島木の用語が「彼獨自のものになつてゐるのではない」と言う。その証拠として、「生活の探求」から特別なボキャブラリーの具体例を数多く挙げながら、それらが文学の言葉になつていないことを的確に論じている。

その論証のプロセスには、次のような一節もある。

島木氏は中野氏が「鑿で木に穴をうがつ」といふことはないと言つたのに對して「信用のおける辭書」を調べて、「中野氏は何か誤解をしてゐるのではないか」と反駁してゐる。中野氏が何を言はうとしたかは別として、私たちには誰しもその人特有の言葉づかひがあることは言うまでもない。

ここに引用されているのは、中野重治が「探求の不徹底——『生活の探求』を読む——」（『帝國大学新聞』37・11・8）で、「鑿で木に穴を「うがつ」ということはない」と批判した表現を引いての言葉である。「探求の不徹底」で批判されたのを受けて、島木は同じ「帝國大学新聞」に反批判の文章（『作品批評の性格』37・11・15）を寄せた。辭書を調べて云々というのは、この反批判の中の言葉だ。島木の反批判に、今度は中野が「島木健作氏に答え」という再批判を「文藝」（38・2）に寄せた。これは原稿六十七枚に及ぶ大論文で、『生活の探求』を徹底的に批評しきつたものだったが、折からの執筆禁止措置のために印刷間際に削除され、公表されることはなかつたものである。「島木健作氏に答え」から、「鑿で木に穴をうがつ」という表現についての中野の再批判を挙げておけば、それは「藝術的表現でない」「小説の描写言葉として根本的に観察不足だ」というにあつた。

窪川がこの「島木健作氏に答え」を読んでいたのかどうかはわからない。「鑿で木に穴をうがつ」問題についても、「中野氏が何を言はうとしたかは別として」と言うにとどめていて、中野の再批判を踏まえた展開をしているわけではない。

しかし、「島木健作氏に答え」と同様に長編論文である「島木健作論」は、島木のボキャブラリーの詳細な追究を通して、主人公の認識・分析の不徹底、作者の思考の形而上性を指摘し、「作者が機械的な形而上的な對比方法によつて、知識階級の批判から出發してゐるので、作者は否應なしにその批判の地盤をなしてゐる前記のごとき時代の常識に、即ち最

も既成的な観念に頼るに至つてゐるのだ」と厳しく批判している。

こうした窪川の批評姿勢は、まさに、中野の言う「対象にたいする愛憎が深いことによつてかえつて対象にたいする取りあつかいが綿密、親切をきわめている」「批評文学を科学の上に建てようとしている点、無関係なように見える日本語の成長発展のためにも有力な暗示を与えている」という評言にあたるものだろう。

そして、島木健作が「信用のおける辭書」を引いて、「うがつ」とは穴をあけることであり、鑿とは「物をうがつ器」である、とくどくと述べているのに対して窪川の明晰な批判が、ある意味では、再批判を公表できなかった中野への、強力な支援と見えないこともない。

#### 4

しかし、窪川鶴次郎の全批評活動の中で、中野重治が最も注目したものは何かを問うとなると、それには別のものを挙げねばならない。

中野は、「ヒューマンイズムの問題——個人の防衛あるいは人間性をまもるということ——」（『帝國大学新聞』36・11・16）で、当時盛んに論議されていたヒューマンイズムの問題を取り上げている。そこで中野は、窪川鶴次郎の座談会（『昭和十一年文藝界展望』36・12「新潮」）での発言に注目した。中野は、座談会の発言記録そのままではないがと断りながら、次のように引用している。

マルクス主義がヒューマンイズムの理想的な実現を究極に於て目標としてゐるのならば、そこへの過程におけるすべての行為・手段のなかにも、そのヒューマンイズムに到るための努力がなければならぬ。そこへ到りつくまでの個々の行為・手段のなかに、すでにヒューマンイズムの一歩一歩の実現がなければならぬ。

意を尽くした要約である。ここで窪川は、行為・手段そのものにも、また行為・手段のプロセスにもヒューマンイズムが実現されているべきことを明言している。

さらに中野は、トルラーの『獄中からの手紙』（芝書店、36・5）の訳者内山敏が、「あとがき」で引用したロマン・ロランの言葉、「不正な手段によつて、どうして正しい目的を実現することができよう」（『ただかの十五年』）という言葉は、窪川の発言に一致するものと指摘する。これらの言葉は、翌年の「真実は下等であり得るか——ノートとして——」（『新潮』37・9）でも冒頭に再引用される。窪川の発言は「ヒューマンイズムの問題」での要約そのままに、ロマン・ロランの方は新たに「目的のためには手段をえらばずといわれているが、それは間違っている」という言葉を加えて、両者が並べられている。

二つの引用によつて提示される内容は、この論の要に止まるものではなく、中野重治がその後も長く意識し続けることになる重要な視点となつていく。事実、戦後の出版期においても真つ先に取り上げられることになる。

敗戦の翌年、一九四六年には、中野重治は荒正人、平野謙との間で論争を交わした。いわゆる「戦後「政治と文学」論争」である。その発端となった「批評の人間性」(『新日本文学』46・7)に、「政治における目的と手段の関係、目的が人間的であるためには個々の手段そのものが同時に人間的でなければならぬことについては前に窪川鶴次郎が書いた」と書き込んだ。

この批評で中野は、荒の「第二の青春」(『近代文学』46・2)や平野の「ひとつの反措定」(『新生活』46・4、5合併)を取り上げながら、彼らが反人間的、非人間的であることを痛烈に批判した。右の引用部分に関わっては、平野が「ひとつの反措定」で「目的のためには手段をえらばぬという点に政治の特徴がある」と書いたことへの批判として、窪川の言葉が援用されたことになる。

もともと、「批評の人間性」という表題そのものに表れているように、中野重治が「人間性」あるいは「人間的」という視点を批評の核として据えていたことは明らかだ。それも、すでに触れてきたように、窪川の言葉に触発されつつ、認識を深めてきたものと言えよう。

さらに、一九四八年七月号「書評」のアンケート「私は何を読むか」には、「窪川鶴次郎の『人間中心の文学思想』(解放社・九十円)を読んだ大いに勉強になった」と答えている。一九四七年に刊行された『人間中心の文学思想』は、戦前に書かれた七編の評論を収録したものである。その冒頭に置かれたのが、書名にもなっている「人間中心の文学思想」である。この評論は、『現代文学論』の末尾を飾り、「著を締めくくると

のとして書き下ろされたものであった。末尾か冒頭かの違いはあれ、この論が窪川にとつて、相当重要なものとして位置づけられていたことは言うまでもないだろう。かつて、『現代文学論』で読んだものを、戦後再び中野は注意深く読み込んだことであろう。

「人間中心の文学思想」で窪川は何を論じたのか。そこでは、一九三八年当時の文学について、人間中心の文学思想が混乱していることを、多くの実例や多様な現象を挙げつつ、繰り返して指摘した。そして、「作家たちは生きた人間に頼つてゐるのではなく、究極においては、現實における人間の存在、存在の仕方を探求することによつて、生きた人間を再現することを目指して行くのである」と述べ、人間中心の文学思想の重要性を論じたのである。その上で、窪川は次のように書いている。

行動の具體的な描寫が何故に生きた人間を本質的に表示してゐるかといふことは、人間相互の關係の具體的な描寫と、人間の周圍にあつて、彼等をそのやうに行動せしめるところの諸條件、即ち彼等の生活の經濟的、社會的、道德的等の、一口に言へばその環境と人間の内面的なものとの相互關係の複雑な狀況の具體的な描寫とを與へるからである

生活條件や社會環境は生きた人間の中に統一されて生かされる時のみ、その生活條件や社會環境もまた人間的なものとなり得る

人間を「経済的、社会的、道徳的」関係から捉えるべきこと、「生活條件や社会環境」は「生きた人間の中に統一される」時にのみ「人間的」になり得ること、が論じられている。これが、「人間」あるいは「人間的」であることに関する窪川の認識である。

論中、「こゝに言ふ人間中心の文学思想とは、何等かの特定のヒューマニテイの概念をその基礎に持つてゐる譯ではない」と用心深く述べているが、こうした認識の背後には、「フォイエルバッハに關するテーゼ」でマルクスが述べた、「人間の本質はなんら個々の個人に内在するところの抽象體ではない。その現實に於ては人間の本質は社会的諸關係の總體である」(『ドイツ・イデオロギー』三木清訳、岩波文庫、30・7)という言葉が透けて見えてくる。

中野重治も「批評の人間性 二二(『新日本文学』47・5)で、「社会的・政治的諸事件にたいする文学者の態度の問題も同じことにかかわる。これは一方からいえば「社会的」「政治的」と「文学的」との關係についての二元論からの脱却の問題である。文学は人間の全人間的営みの上に立つ」と明言したが、「人間中心の文学思想」への高い評価も、こうした視点・認識を読み取ったからこそそのものであろうと思う。

さて、ここで一挙に最晩年の文章に飛びたい。新版『中野重治全集』第十卷(79・1)につけた「著者うしろ書」である。

ただ読みかえしてみても一番に氣のつくのは、自分という人間が、いくらか何かを理解することができる、ひとりだけで考えて新しいものに

自分としてたどりつくこともできる、しかしまた直きに逆もどりしてしまう、元の木阿弥になつてしまう姿、そのさまのことだつた。それがあからさまに出ていて言葉もないが、今という今、わけて氣のつくのが「人間的」のことである。巻末に、「ヒューマニズムの問題——個人の防衛あるいは人間性をまもるということ——」で窪川鶴次郎の言葉に触れたところがあるが、その問題に氣づきながら、その後の長いあいだに、戦後になつてさえ、私が一度二度ならず逆もどりにしていた事実である。

こう記して、あの窪川の座談会発言の要約を三たび引いたあとで、中野は続けて書く。

窪川のこの言葉を、長いあいだに思い出したり忘れたりして私はやつてきたと思う。そこに、重い問題をかかるとして私にやよほど控え目に扱うべき対象をいい氣になつて扱つて書いたこともあつた。

生涯を振り返つた時に書き込まれた「元の木阿弥」という言葉、それは何を言おうとしたものだろうか。

中野は一つ前の「著者うしろ書」(『中野重治全集』第二十二卷、78・12)でも「元の木阿弥」と書き記している。こちらでは、窪川の小説「風雲」の扱い方への反省として使われている。かつて中野は、「文学者に

就て」について——貴司山治——」（『行動』35・2）で、貴司山治の「文学者に就て」（『東京朝日新聞』34・12・12〜15）に反駁する中で、貴司の「風雲」評を批判したのだが、小説としての全体性や展開をしっかりと見ずに取り扱ったことを自分の誤りだったとしている。そして、室生犀星が、刑務所に拘禁された主人公が病氣と先行きを考えて毎日糞便を検査するところに目をとめていたことを挙げ、中野は自分のやり方を恥じている。そうして、「私の元の木阿弥のうち、これは最大のものの一つだったとそのとき以来私は思っている」と記しているのである。

中野が窪川の座談会発言を書き留めるのはこの翌年、一九三六年のことだが、以来、政治における手段と目的が人間的でなければならぬこと、文学作品の主人公を「人間的」に読み込まなければならぬこと、そのことを十分認識してきたはずだったが、振り返りのなかでは不十分さを痛感せざるを得ないという悔いが、「元の木阿弥」といった言葉として語られたのであろう。小稿ではこの点をこれ以上考察していく紙幅はない。

「元の木阿弥」考は措かざるを得ないが、一九三六年から四十年以上の時を経て、「人間的」のことについて「わけて気のつく」と言う中野がいる。ここまで来ると、最初の言葉を窪川鶴次郎が述べたこと自体はさしたる問題とならぬだろう。しかし、そうであったにせよ、中野重治のほとんど生涯にわたって、窪川鶴次郎の存在とその発言が、私生活のレベルでも、公にされた批評の言葉においても、重要なものとしてあり続けたことは確かなことであろう。（二〇一〇・一一・二五）

※小稿は、二〇〇八年八月二十三日、福井県坂井市丸岡町で開かれた「くちなし忌」第29回・中野重治を偲ぶつどい」で、「重治と鶴次郎」と題して行った記念講演（いきいきプラザ霞の郷）に基づいているが、稿は新たに書き起こしたものである。

※中野重治の引用は小稿冒頭に記した新版『中野重治全集』に拠る。また、窪川鶴次郎の引用はそれぞれ該当の単行本に拠る。

#### 〔資料一覽〕

##### I 交友関係の中の窪川鶴次郎

- ・「嘘とまことと半々に」（30・2 「文学時代」）
- ・「東京市外滝野川町田端四四五」（30・5・2 執筆、98・7 『中野重治全集』第28巻）
- ・「窪川鶴次郎へ」（30・8・7 付、30・12 「ナッパ」）
- ・「窪川鶴次郎へ」（30・8・14 付、30・10 「ナッパ」）
- ・「窪川鶴次郎へ」（30・8・20 付、30・12 「ナッパ」）
- ・「窪川鶴次郎へ」（30・9・8 付、31・3 「ナッパ」）
- ・「窪川鶴次郎へ」（30・9・15 付、31・6 「ナッパ」）
- ・「窪川鶴次郎へ」（30・9・17 付、31・6 「ナッパ」）
- ・「年譜 一」（31・2 『現代日本文学全集』第62篇）
- ・「わが交友」（32・4 「新潮」）
- ・「堀辰雄へ」（32・9・7 付、79・1 『堀辰雄全集』別巻）
- ・「小さい回想」（34・11 「文藝春秋」）

- ・「僕の学生観」(35・3・31「三田新聞」)
  - ・「日本訳「フランスの状態」訳者の言葉」(36・2「文学評論」)
  - ・「日本訳「ハイネの手紙」ことわり書き」(36・2、3「文学界」)
  - ・「クラブへの希望」(36・4「文学評論」)
  - ・「わが文学的自伝」(36・8「新潮」)
  - ・「文化世界の動き」(36・8・20「報知新聞」)
  - ・「自作案内」(38・1「文藝」)
  - ・「くれなゐ」の作者に事よせて」(38・12・22「都新聞」)
  - ・「日本詩歌の思い出」(39・2「短歌研究」)
  - ・「索引のこと」(40・6・20「法政大学新聞」)
  - ・「つまらぬ話―芥川龍之介の「秋山図」は創作であるか」(43・4「四季」)
  - ・「北国文化」雑感」(49・7・26「北国毎日新聞」)
  - ・「性と飢えとの関係」(50・1「文藝春秋」)
  - ・「新潮文庫版『歌のわかれ』前がき」(50・7・30)
  - ・「へちま くちなし えぞすみれ」(51・11・5「図書新聞」)
  - ・「『新日本文学』一九五二年一月号編集後記」(52・1)
  - ・「現実、象徴、近代などの問題」(52・6「斎藤茂吉全集」第8巻月報第2号)
  - ・「ふたしかな記憶」(53・7「中央公論」)
  - ・「岩波文庫版『中野重治詩集』後書き」(56・3)
  - ・「坂の途中」(56・6「文藝」)
  - ・「木の名、鳥の名」(56・10「新潮」)
  - ・「事実と解釈」(56・11、12、57・1「新日本文学」)
  - ・「事務局から 一九五八年二月号」(58・2「新日本文学」)
  - ・「一九三五年のころ」(59・11「室生犀星作品集」第10巻月報第9号)
  - ・「あのころ―江口渙と窪川鶴次郎」(60・12・24「朝日新聞」)
  - ・「死なれて困る」(61・6「中野重治全集」第15巻月報)
  - ・「フィクションと真実」(61・10「新潮」)
  - ・「『驢馬』の時分」(62・5「小説中央公論」)
  - ・「橋本英吉のこと」(64・11「風景」)
  - ・「犀星遺産」(65・9「現代の文学」第2巻月報第29号)
  - ・「故人の手紙」(66・7「文藝春秋」)
  - ・「原鼎あて河上肇書簡」(67・1「展望」)
  - ・「郵便と郵便局」(70・1・3「読売新聞」)
  - ・「文学と私」(71・2・3、NHKの放送文化ライブラリー用の朗読)
  - ・「六月の日記から」(74・8「風景」)
  - ・「沓掛筆記―角川源義と大野林火」(77・11「文藝」)
  - ・「沓掛筆記―外国語のこと」(78・6「文藝」)
  - ・「生理的幼少年期と文学的少青年期―第一巻「詩集」「春さきの風」―」(76・9「中野重治全集」第1巻)
  - ・「最後の一手前として―第二十七巻「文学生活断面」―」(79・6「中野重治全集」第27巻)
- II 批評家・評論家としての窪川鶴次郎
- ・「小説 活動写真 ハリコフ会議」(31・4「中央公論」)
  - ・「文学戦線の一つの問題」(31・10・19「帝國大学新聞」)
  - ・「森山啓へ」(34・4・10付、34・5「文化集団」)
  - ・「室生さんへ返事」(34・12「文藝」)
  - ・「文学者に就て」について―貴司山治―」(35・2「行動」)
  - ・「ヒューマニズムの問題―個人の防衛あるいは人間性をまもるということ―」(36・11・16「帝國大学新聞」)
  - ・「一般的なものにたいする呪い」(37・4「新潮」)

- ・「真実は下等であり得るか―ノートとして―」(37・9「新潮」)
- ・「今年度の回顧」(37・12・10「三田新聞」)
- ・「ねちねちした進み方の必要」(39・7「革新」)
- ・「日本語の問題」(39・12・8・11「都新聞」)
- ・「批評の精神」(39・12下旬号「懸賞界」)
- ・「伊藤整へ―おたずねのようなことにつき」(40・3・5・7「都新聞」)
- ・「空想家とシナリオ」について―自作を語る―(40・4「月刊文章」)
- ・「ぼんやりした記憶―今年上半期の小説・評論」(40・7「文学者」)
- ・「楽しき雑談 二」(40・12「知性」)
- ・「批評の人間性 一」(46・7「新日本文学」)
- ・「『楽しき雑談』第二はしがき」(48・2)
- ・「私は何を讀むか」(48・7「書評」)
- ・「ナップ」について(48・11「日本プロレタリア文学発達史資料」Ⅲ「ナップ時代・上」解説)
- ・「ナップ」時代後半期の意義―より高い段階へ―(49・1「藝術」)
- ・「啄木研究のひろがりについて」(49・7「人民短歌」)
- ・「日本におけるプロレタリア的・革命的文学の流れについて」(51、スロヴァキヤ訳、小林多喜二『蟹工船』解説)
- ・「嘘と文学と日共臨中」(51・6「新日本文学」)
- ・「第二『文学界』・『日本浪漫派』などについて」(52・3「近代日本文学講座」第4巻「近代日本文学の思潮と流派」下)
- ・「最低綱領の問題」52・5・14「日本読書新聞」)
- ・「めくらの垣のぞき」(54・1、2、4、7「俳句」)
- ・「外とのつながり」(55・4・6「新日本文学」)
- ・「プライヴァシーと『せいび』」(61・9「新潮」)
- ・「我慢しすぎたようなところ」(73・6「回想の壺井栄」)

・「窪川鶴次郎『昭和十年代文学の立場』」(73・7「昭和十年代文学の立場」帯文)

・「三十年あれこれの一つ」(76・6「新日本文学」)

・「後悔さきに立たず―第二十二巻「わが文学的自伝」『日本語実用の面』

―」(78・12「中野重治全集」第22巻)

・「二半年たらずと多少の勉強―第十巻「論議と小品」―」(79・1「中野

重治全集」第10巻)